女傑

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女傑

【Ｎコード】
Ｎ３２０５Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ルネサンス期イタリア。稀代の権謀家であり野心家であるチェーザレ＝ボルジアの前に立ちはだかる一人の女がいた。彼女はどのようにして戦ったか。カテリーナ＝スフォルツアのお話です。

第一章

女傑

「私に恐怖を感じさせるには私の新造が余程強く動悸を打たなければなりません」
戦場に向かう馬の上。漆黒の服とマントに身を包んだ男がその言葉を呟いた。
浅黒い肌に鞭の様にしなやかな身体。黒く長い髪の毛は波がかりその整った顔をさらに際立たせていた。
鋭利な美貌であった。目は鋭く口元は引き締まっている。だがそこにある顔立ちには陰がさし何処か邪悪な雰囲気も漂わせていた。
「いい言葉だとは思わないか」
彼はそう横を進む男に尋ねてきた。
「ミケロット」
そして彼の名を呼んだ。呼ばれた男は黄金色の髪をした痩せた男であった。長身でその目には剣呑な光を宿らせていた。
「確かに」
その男ミケロットは彼の言葉に頷いた。
「あの女の言葉ですな」
「そうだ」
彼は答えた。
「そうした言葉を口にする女を是非この手に」
そう言って不敵に笑う。
「それが男というものではないかね」
「ですが公爵」
ミケロットはそんな彼に声をかけた。
「今度の戦は」
「わかっている」
彼は答えた。声もまた鋭利なものであった。

「今度の戦はあくまでロマーニャ占領にある」
「はい」
「しかしだ」
だが彼はそれでも言うのである。
「そこにある宝物として美女というのもまた。面白いではないか」
「では勝利の暁には」
「うむ」
その不敵な笑みで頷いてきた。
「そのつもりだ。だがその前に」
「誘いはかけてみますか」
「従うとは思えないがな」
彼はそんな話をしながら軍を引き連れて戦場に向かっていた。彼の名をヴァレンティーノ公爵、チェーザレ＝ボルジアという。ルネサンスの影の世界にいた魔王である。
教皇であるアレクサンドル六世の次男であった。長男は早くに亡くなり彼がボルジア家の嫡子となった。彼は父にヴァレンテイーノ枢機卿としての地位を与えられ栄華を極めていた。
だが彼はその紅の法衣を脱ぎ捨て俗世に戻り軍を率いていた。全てはイタリア統一という己の野心の為。今颯爽と戦場に向かっていたのである。
それを迎え撃つはカテリーナ＝スフォルツァ。猛々しい猛女であった。黄金色の髪に雪の様に白い肌の気品ある美貌を持つ女であった。今チェーザレは彼女のところに向かっていたのである。
そのことはカテリーナの耳にもすぐに入った。だが彼は全く物怖じしなかった。
「面白い」
チェーザレと同じ笑みを浮かべて笑うだけであった。
「して公爵はどちらに向かわれていますか」
報告をしてきた家臣に問うた。彼女は今居城の自室にいた。高貴な貴夫人の部屋とは思えぬ無骨で殺風景な趣の部屋であった。これ

が彼女の家の趣でもあった。
彼女の家は傭兵の家であった。剣により成り上がってきた家だ。それによりミラノ公爵にまでなったのだ。その血は忠実に受け継がれていた。
最初の夫の叔父である教皇が亡くなった時は権勢と我が身を護る為にサン＝タンジェロ城に篭城した。その夫が殺された時も彼女は逸話を残している。
自室で夫が殺されたのを聞いたカテリーナは何ら動じることはなかった。暗殺者達に捕虜にされてしまったがその直前に家臣を脱出させて援軍を呼ばしていた。そのうえで捕虜になったのである。
暗殺者達はカテリーナを捕虜にしたもののそれからどうするべきか手を打ちかねていた。カテリーナの家臣達が護る城を陥落させようとしたがその護りは思いの他堅固でどうにも進んでいなかったのである。
「それでは」
ここでカテリーナが出て来たのである。
「私が彼等を説得してきましょう」
「ほう」
暗殺者達はそれを聞きカテリーナに顔を向けてきた。
「貴女がですか」
「ええ。それが何か」
カテリーナは動じることなくその言葉に返した。
「そのまま逃げられるというのではないでしょうな」
「まさか」
カテリーナは彼等の猜疑の目も言葉も受け流して述べた。
「子供達がいるのにですか」
「確かに」
彼等はまずはそれを聞いた。
「それではどうぞ行かれよ」
「ただし戻られなかった場合には」

「わかっています」
カテリーナはそれに答えた。そして家臣達の説得に向かったのであった。
そのまま城から出される。その時彼女は不敵な笑みを浮かべていたという。
彼女は帰っては来なかった。家臣達と再会するとそのまま飲み食いしベッドに寝てしまったのである。
これに怒ったのが暗殺者達であった。憤懣やるかたなく子供達を連れて来て彼女のいる城の城門まで出て来たのである。
「出て来い！」
彼等は怒りに顔を歪めてこう叫んでいた。

第二章

「出て来ないと子供達の命はないぞ！」
「そうだ！」
彼等は口々に叫ぶ。
「よくも騙してくれたな！」
「どういうつもりだ！」
「何か用か！」
そこにカテリーナが姿を現わした。城門の上に悠然と立っていた。
「反逆者共が！」
彼女は轟然とそこに立っていた。そして反逆者達を見下ろしていたのだ。
「反逆者だと！」
「そうだ！我が夫を殺した謀反人達よ！覚悟はできているな！」
昨日のしおらしい様子は何処へ行ったのか。完全に烈女の顔になっていた。
「惨たらしい死が御前達を待っているぞ！」
「馬鹿が！」
反逆者達はその言葉を聞いて叫んだ。
「死ぬのは御前の子供達だ！」
「ここで殺してやろうか！」
「馬鹿者共が！」
だがカテリーナはその言葉を一笑に伏してしまった。そしてスカートをめくりあげるとやにわにこう叫んだのである。
「子供なぞこれで何人でも作れるということを知らないのか！」
「なっ・・・・・・！」
この言葉には流石に誰も言い返せなかった。まさか公爵家の血を引く美貌の貴夫人の口からこんな言葉が出るとは夢にも思わなかったからだ。

「わかったら早く地獄に落ちるがいい！」
カテリーナはスカートを元に戻してまた叫んだ。
「者共、打って出よ！」
すぐに出撃の命を下してきた。
「反逆者共を八つ裂きにするのだ！」
「くっ！」
この言葉で勝敗は決した。彼等は結果として命からがら逃げ出しカテリーナも子供達も助かった。カテリーナの肝を示す逸話の一つであった。
彼女は荒々しい性格であった。それはこの事件の後も変わることがなかった。
こんな話がある。彼女は二人目の夫を密かに迎えていた。だがこの夫は軽率で尊大な男であった。その為周囲やカテリーナの息子とトラブルを起こしそのせいで暗殺されてしまった。このことを聞いたカテリーナは烈火の如く怒り狂った。
「一つ言っておくことがあります」
その話を聞いてカテリーナはまず言った。
「スフォルツァ家では自分のことは自分で始末をつけます」
その燃え上がるような怒りを後ろにたたえての言葉である。
「その際に誰の手も借りたりなぞしません。そして」
最後の言葉こそイタリア中を震え上がらせた言葉であった。
「復讐は血で。それも地獄の血によって償わせます」
そう言ってすぐに報復を開始した。まずは首謀者の一人が捕らわれ大聖堂のバルコニーから全裸で吊るされた。処刑されたその亡骸は実に無残なものだったという。
それから二人の僧侶を含む七人が。拷問で陰謀の全貌を白状させられてから馬で引き摺られて殺された。その亡骸はやはりバルコニーに吊るされた。
最後の一人は逃げた。だがそれを見逃すようなカテリーナではなく彼にも刺客が放たれた。仇は地獄の果てまで追い詰めてその命を

奪う、それがカテリーナ＝スフォルツァという女だったのだ。
　これで彼女の復讐が終わったのではなかった。彼女は暗殺者の一族までも捕らえさせた。そして怒りに燃える顔をそのままにしてこう言ったのであった。
「仇の血、この世から絶やすのです」
　と。こうして僅か十日でこの事件に連座して四十名の者が惨たらしい方法で処刑されていった。当時の欧州は多分に血生臭い世界であったがカテリーナのそれは特筆するに値するものであった。敵は何処までも憎み、愛は何処までも追い掛ける。それがカテリーナではあった。
「素晴らしい女だと思わないかね」
　チェーザレはまずはカテリーナの実家であるミラノを陥落させていた。それから今カテリーナの下へ向かっているのである。その途中で彼は部下達に対してこう述べていた。
「美しいだけではない」
　銀の杯に紅のワインをたたえていた。それを眺めながらの言葉であった。
「強い女だ。私はそうした女が好きだ」
　銀の冷たさを感じながらの言葉であった。杯のワインが鮮血の赤をそこに映し出していた。今彼は部下達と共に宿舎にしている城の広間にいた。そこで酒を楽しんでいたのである。
「だからだ」
　彼は言う。
「彼女を何としても手に入れる」
「何としてもですか」
「そうだ」
　部下の一人の言葉に悠然として応えた。
「フォルリとイモーラもな。全て手に入れる」
「それはまた」
　茶色の髪の口髭の男がそれに笑ってきた。

「公爵のいつもの悪い癖が出られたようですな」
「ほう」
チェーザレはその言葉に別の笑みを返してきた。
「何が言いたいのだ、リカルドよ」
「全てのものを欲する。悪い癖ですな」
「また妙なことを言う」
チェーザレの笑みはその言葉を楽しむ笑みであった。彼はそうした言葉を自分への賛辞と受け止めていたのである。
「私が全てを欲するのはだ」
「はい」
その男リカルドはそれに応えた。
「それを愛するからだ」
「愛されているのですか」
「そうあ、イタリアも勝利も」
その言葉には美しい響きと共に悪魔的な哄笑も感じられた。不思議な言葉であった。
「そして美女も」
「その全てを」
「愛している。その為には手段を選ぶつもりはない」
「左様ですか」
「そうだ。手段を選ぶのは愚か者だ」
チェーザレは言う。
「大切なのは結果だ。違うか」
「いえ」
リカルドもそれは否定しない。
「その通りです」
「ならばよい」
ここで否定していたらおそらく命が危ないであろう。リカルドもそれがわかってチェーザレの側にいるのである。
チェーザレは冷酷非情な男として知られていた。こういう話があ

る。
　彼の弟にホワンという者がいた。美男子であり父である教皇から最も愛され教会軍総司令官の地位とガンディア公の爵位を与えられた。世俗の権威も名声も彼のものであった。
　だがそれはチェーザレが欲していたものであった。そもそも信仰心なぞない彼は教会での地位にも名声にも何ら関心を抱いてはいなかったのである。彼の野望はイタリア統一であった。だがそれを為しえるのはホワンであった。つまり彼はホワンを消してその地位を取って代わる根拠があったのである。
　ホワンはこの時より二年前に謎の死を遂げていた。暗殺であった。ティベレ河に浮かんでいた河の泥にまみれた傷だらけの遺体が彼であった。かつての美男子もこうなっては何の面影もなかった。
　彼の暗殺を聞いた父教皇は取り乱した。そしてすぐに犯人の捜査を開始した。
「万難を拝し犯人を捕らえよ！」
　そこに教皇の怒りと報復の感情があるのは明らかであった。右手に奸智、左手に謀略。スペインからやって来てボローニャ大学で哲学、法学、神学の三つの博士号を手に入れた大学はじまって以来の秀才と謳われた彼の頭脳は信仰ではなくそうした陰謀に向けられてきた。同時に彼は好色であり狡猾で欲深い人物であった。しかも暗殺を常とする残忍な面も強かった。これはチャーザレにも色濃く受け継がれていたがこの時はその残忍さが特に強く出て来た。
「犯人はすぐに見つかる」
「そして惨たらしく処刑されるだろう」
　誰もがそう思った。すぐにめぼしい人間が多数挙げられた。
　これが実に多かった。そもそもボルジア家というのは謀略でのしあがってきた家である。それだけに多くの敵を持っていて怨みも買っていた。ホワンとて例外ではなく彼自身も敵を多く抱えていた。容疑者はそれこそ山の様にいた。
　大勢の者が取調べを受けたが次々にその潔白が証明された。こう

して容疑者は次々に減っていった。

第三章

事件は意外にも迷宮入りになるかと思われた。だがさらに意外な方向に進むこととなった。

教皇が突如として事件の捜査を打ち切るように言ったのだ。事件の捜査開始から僅か三週間後のことである。

これを不思議に思わない者はいなかった、何故捜査は迷宮入りしたか。教皇は捜査を打ち切るように言ったのか。実に奇怪な話であった。

「何だったんだ、あの事件は」

「何かおかしいぞ」

誰もがそう言った。そしてそれを機会とするかのようにチェーザレが世俗に戻った。そして今に至るのである。

事件は何かそのまま下火になっていた。だが人々はその中で考えるのであった。

「あの事件な」

「どうした？」

囁きに問う声がした。

「おかしいと思わないか」

「犯人がわからなかったことか」

「それと教皇様の動きだよ」

声は言う。

「何で捜査を打ち切ったんだ？」

「それか」

「若しかしてな」

誰かが囁く。

「教皇様は犯人を知っているんじゃないのか」

「？どういうことだよ」

誰もがその囁きに耳をそばだてた。

「犯人を知って、事件の真相も知ったから捜査を打ち切ったんじゃないのか」
「何でだ！？」
皆それを聞いて考え込んだ。
「何でそう思うんだ？」
「だってな」
声は言う。
「あの教皇様だぜ」
まずはこの前提があった。アレクサンドル六世という教皇である。残忍で執念深い。敵に対しては何処までも残忍な男である。
「それがな」
「犯人を捜すのを止めたってことか」
「あの人なら何があっても捜し出すよな」
「まあな」
それに頷く言葉が聞こえてきた。
「それで後は嬲り殺しだな」
「ましてや殺されたのがガンディア公だしな」
彼が最も愛していた息子を殺されたのである。そうしないではいられないと誰もが思う。
「それを何もしない」
「やっぱり知ってるってことか」
「だから打ち切ったんだろうな」
声は語る。
「けれどだ」
ここで謎が浮かんできた。
「犯人は誰だ？」
「教皇様が知っているって」
「そうだよ」
「問題はそこだよ」
声が重なってきた。

「誰が殺したのか」
「誰だ？」
「誰なんだ？」
彼等は囁き合う。まるで闇の中での顔の見えない囁きであった。
「ガンディア公を暗殺したのは」
「誰なんだ？」
「そこだ」
また誰かが言った。
「公爵が死んでだ」
「ああ」
「一番得をするのは誰か」
「一番得をするのか」
「そうだ」
人々は話し合う。影の中で。
「誰かか」
「その時か？」
「いや」
それには否定する声が浮かび出た。
「今見たらわからないか？誰が得をしているのか」
「各国の君主か？」
「それとも司祭様か？」
人々は言い合う。この時代聖職者は即ち政治家であった。陰謀や暗殺も教会では日常茶飯事であった。そもそもボルジア家にしろそうであるしあのメディチ家も教皇を輩出している。陰謀渦巻くのが教会であったのだ。
「誰だ？」
「公爵と対立している枢機卿も多かったよな」
「そうだな」
ボルジア家そのものが敵が多い。ホワンもまた例外ではなかった。
「その中にいるのか？」

「いや、待て」
これには懐疑的な声が出て来た。
「それなら教皇様を直接狙わないか？」
「教皇様をか」
「そうだ。どうせやるならな。も若くは」
「ヴァレンティーノ枢機卿」
チェーザレの名が出て来た。
「どちらかだろう、狙うのは」
「そういうえばそうか」
「ボルジアといえばやはりあの二人だからな」
「そうだ。あの二人を狙うよな」
人々はここでホワン暗殺に政治的な理由を外しかけた。
「無理かどうかは別にしてだ」
「政治的にか」
しかしこの言葉に反応を示す声もまただ出て来た。
「どうした？」
「やっぱり政治的だよな」
「何を言っているんだ？」
「それだ」
声の中の一つが言うのであった。
「政治的な理由で利益を得ている人間」
「ううん」
そう言われても容易には考えが及ばない。
「しかも」
「しかも？」
「公爵を殺してもだ」
何か話がさらに物騒になっていっていた。
「教皇様の怒りから身をかわせる人間だ」
「教皇様の怒りからか」
「そうだ。教皇様は犯人を御存知のようだしな」

「犯人を既に御存知で」
「だが何もしない」
「誰だ？」
彼等は考えた。
「教皇様の怒りから身をかわせる程の人間となると」
「かえって限られるぞ」
「そして今得をしているとなると」
「おい」
「ああ」
声達は急にあることに気付いた。
「間違いない」
「そうだ、答えは一つしかない」
彼等は遂に全てを察した。答えはそこに集まっていた。
「そういえばな」
そして一つ話が出て来た。
「教皇様はあの方には一言も声をかけられなかった時があったよな」
「そうだったな」
「事件のすぐ後だったな」
「それだな」
もうこれでおおよそのことはわかった。言わずともだ。
「間違いないな」
「道理で」
答えは次々にはっきりしたものになっていく。
「そういえば幼い頃妹君の取り合いもされていたそうだな」
「そうらしいな」
ボルジア家の娘といえばあのルクレツィア＝ボルジアである。美貌で知られ今でもその名を残す永遠の美女である。その人物については様々な意見があるが一つだけはっきりと言われていることがある。絶世の美女であったことである。今も残っている肖像画にもそれははっきりと出ている。

「やっぱり間違いないな」
「確実だな」
「しかしだ」
声達はさらに言い合った。
「この話は」
「わかってるさ」
彼等は既にわかっていた。

第四章

「絶対にはっきりしないな」
「はっきりさせた奴がいたら」
「公爵様に続いて」
「ティベレ川にどぼんだな」
「そういうことだ」
こうした噂であった。この噂の根拠であるかのように各国の外交官や諜報官達も口々にこう述べるのであった。
「この事件における犯人は発見されてはならない故に決して発見されはしない。発見されるにはあまりにも大物であるからだ」
と。真相を知っているであろう彼等もこう言って口をつぐんでいた。
そんな話があった。チェーザレ＝ボルジアという男は必要とあらば手段を選ぶことはない。そうした男であると皆がみなしていた。その彼が今カテリーナの城へ向かっていたのだ。
「さて」
チェーザレはワインの杯を手に話を進める。
「最早ミラノはない」
「はい」
家臣達はその言葉に頷く。既にカテリーナの実家であるミラノ公国はチェーザレと結んだフランスにより占領されている。フランス王ルイ十二世は貪欲な男で以前からイタリア侵略の機会を狙っており渡りに舟の話であったのだ。
そしてカテリーナ自身も今チェーザレが攻めんとしている。風雲急を告げる事態であったのだ。
「次はだ」
「どうされるのですか？」
「民だ」

チェーザレは言った。
「民を掴むぞ」
「といいますと」
「彼女は何だ」
ここでチェーザレはその家臣達に問うてきた。
「何者だ」
「はっ」
それにリカルドが応えてきた。
「女であります。そして」
「そして？」
「剣を手に戦う戦士であります」
「そうだ」
チェーザレはその言葉に満足した笑みを浮かべて頷いてみせた。
「その通りだ。確かに彼女は戦士だ」
「だが政治家ではない」
家臣のうちの一人が言った。
「そういうことですね」
「うむ。だからだ」
チェーザレはまた言う。
「民達はその残酷さと圧政を恐れている。ならば容易い」
「それではまずはどちらを」
「イモーラだ」
チェーザレは決断を下した。
「イモーラに兵を進める。兵を進めながら」
さらに言葉を続ける。
「これまで通りの条件を認めると約束する。いいな」
「はい」
チェーザレは政治家でもあった。民のことも頭の中に入れ、彼等の支持を取り付けることの重要性をはっきりとわかっていた。また統治者としても優れておりこのことが彼を彼たらしめていた。

「では明日にイモーラだ」
「そしてまずは伯爵夫人の右腕を」
「次には左腕をだ」
チェーザレはイモーラだけを見ていたのではなかった。それからも見ていた。
「それからようやく」
「伯爵夫人そのものを」
「再びこの目で見たいのだ」
チェーザレの笑みが何か恋をするものになっていた。
「あれはな」
「はい」
家臣達もそれに応える。
「私がまだ少年だった頃だ。ローマにいた時だ」
彼はその時にカテリーナを見ていたのである。まだ枢機卿であった父の側にいて彼女を見ていたのである。
「麗しい姿だった。もっともあの時はまだ唯の花だった」
「唯の、ですか」
「そうだ。唯のな」
それをまた言った。
「そう思っていた。だがそれは違っていた」
そして次にこう述べた。
「美しい花には棘がある」
古来より言われている言葉を彼も口にした。
「それが彼女なのだ。それを知ってからだったな」
チェーザレの言葉が楽しむものになっていた。
「彼女のことを心に留めたのは。そして今」
彼は今遥かなカテリーナの居城を見ていた。
「彼女の御前に。よいな」
「はい」
「そして」

「イタリアをも」
次に彼は巨大な長靴を見た。イタリアの大地を。
「手に入れるぞ。よいな」
「はっ」
家臣達は一斉にそれに応える。チェーザレがイモーラに達したのは翌日のことであった。
市民達は何の抵抗もしなかった。それどころかチェーザレの大軍を笑顔で迎える有様であった。
それを聞いたカテリーナは我が耳を疑った。まさかこうもあっさりと彼等がチェーザレに鞍替えするとは思っていなかったからだ。
「それはまことですか」
「残念ながら」
カテリーナの家臣達は苦渋に満ちた声で報告していた。カテリーナはそれでもまだその言葉が信じられなかった。
「その様なことが」
「全てはヴァレンティーノ公爵の思惑通りでした」
「あの公爵の」
カテリーナの脳裏にあの陰のある端整な横顔が浮かんだ。彼女もチェーザレの顔は知っていた。
「そうです。公爵は彼等にあることを告げまして」
「それによってイモーラが鞍替えしたというのですか」
「はい」
家臣達は項垂れて述べた。
「今まで通りの権利も地位も保障すると。そしてその身の安全も財産も」
「それだけでですか」
「そこに公爵の統治が利いたようであります」
「公爵の！？」
これはカテリーナには考えの及ぶものではなかった。彼女はあくまで武器を持つ者でありペンを持つ者ではなかったからだ。しかし

チェーザレはその両方を備えていた。今その差が大きく出たのだ。
「左様です。公爵の統治の評判は知れ渡っておりまして」
「それを聞いたイモーラの者達は皆」
「馬鹿な」
カテリーナはそれを聞いてもまだ信じられなかった。
「だからといって」
「ですがイモーラが公爵の手に落ちたのは事実」
「そして公爵は今その街に足掛かりを置きました。次には間違いなくフォルリに来るでしょう」
「フォルリに」
カテリーナはそれを聞いて部屋の窓から城塞の隣にある街を見た。今までは何も思うところなく見ていた街が急に暗雲立ち込めるものに見えてきた。
しかしそれに恐怖を感じるカテリーナではなかった。それでも彼女は毅然としていた。
「ならばよし」
そのうえでの言葉であった。
「では城塞、そしてフォルリの護りを固めなさい」
そう命じてきた。
「宜しいですね。退くことはありません」
「はっ」
カテリーナの家臣達もそれに頷いた。彼女も決戦の意思を固めていた。
その夜カテリーナは一人自室にいた。既に城塞には武器弾薬が運び込まれ城の周囲の木々が切り払われた。堀には水が湛えられ決戦の準備は整っていた。
「ヴァレンティーノ公爵」
奇しくも昨夜のチェーザレと同じ赤いワインをその手にしていた。
「相手にとって不足はないわ」
萌える目で今彼の顔を心の中に見据えていた。

「私もスフォルツァの女、逃げたりはしない」
目の光がさらに強くなる。闇の中でそれが燃え上がっていた。
「最後まで戦う。剣の家として」
彼女は勝利を望んではいなかった。戦うことを望んでいた。そしてその決意が変わることはなかった。

第五章

イモーラに入城したチェーザレは市民達の歓待の声に囲まれていた。その中を意気揚々と馬で進む。
「何時聞いてもいいものだ」
彼はその中で満足気な顔で述べた。
「歓喜の声というのはな」
「それも自分に向けられているからですな」
「そうだ」
そうミケロットに返した。
「この者達も皆私の宝となる」
市民達を見ながらそう語った。
「イタリアの民達がな。そしてイタリアもまた」
「閣下のものに」
「今はその一歩だ」
チェーザレの声が引き締まった。
「よいな。その一歩を踏み出しただけだ」
「はい」
ミケロットもそれに応える。
「しかしこの一歩を最大限に使わせてもらう。何よりもな」
「御意」
チェーザレは市民達の身の安全も権利も保障しその法を伝えた。それはカテリーナの敷いていた法よりも遥かに寛大でありイモーラの者達を驚かせたのであった。
「あの」
イモーラの実力者達は領主の邸宅に入ったチェーザレと面会していた。謁見の間で主の座に座るチェーザレに対して恐る恐る問うていた。
「これはまことですか」

「何がだ？」
チェーザレは悠然とした動作で彼等に顔を向けていた。その後ろにはミケロットやリカルドといった腹心達が控えている。
「この様な法なぞ」
「厳格か？」
「いえ」
「滅相もありません」
彼等は恐縮してそう返した。
「ここまで寛容だとは」
「何か。嘘のようでございます」
「私は民に対して嘘は言わぬ」
民に対しては、である。他の者に対してはわからない。
「それにこれが教皇領での決まりだ」
「そうなのですか」
「そうだ。今からここは教皇様のものに帰す」
それをあらためて伝える。
「ならばそれが適用されるのも道理。これでよいか」
「はあ」
「そうでしたら」
イモーラの者達はそれを聞いて応える。
「ではわかったな」
チェーザレは彼等を一瞥してからまた述べた。
「これからもそれぞれの責務に励むがよい。それだけだ」
「は、はい」
彼等は驚きを隠せないままその場を後にした。その夜チェーザレはミケロットと話をしていた。
「どうやら彼等は驚きを隠せないようですな」
ミケロットはその低いくぐもった声で主にそう述べた。
「閣下のやり方に」
「私の評判は聞いていると思うがな」

チェーザレは笑いもせずにそう述べた。
「それを考えると当然ではないか」
「だからでしょう」
ミケロットの言葉は何か達観すら感じられるものであった。
「だからとは？」
「閣下を御存知だからこそ。恐れていたのです」
「恐れているか」
チェーザレはその言葉を聞いて呟いた。
「私を」
「はい」
ミケロットはその言葉に頷く。
「間違いなく」
「恐れられるのは構わない」
チェーザレはミケロットのその言葉を受けてこう述べた。
「それもまた君主なのだからな」
「左様ですか」
「それは御前もわかっていると思うが」
ミケロットを見てこう問うてきた。
「それはどうなのだ」
「確かに」
ミケロットもそれを認めてきた。
「その通りです」
「ふむ」
チェーザレはそれを聞いてまずは頷いてみせた。
「他の者がどう思っているのかはいいのだ。ただ」
「ただ？」
「私は私の道を行くだけだ」
冷たささえ感じられる言葉であった。冷徹と言うべき。
「それだけだ。だが民達もまた私の宝」
その心は変わらない。

「イタリアなのだからな。それだけだ」
「宝ですか」
「そうだ」
チェーザレははっきりと言い切った。
「宝を手にするのが私の夢なのだ。イタリアという宝をな」
「それではその為には」
「悪魔にでもなろう」
口の端だけで笑った。しかしそれは一瞬ですぐに表情が消えた。
「それだけだ」
「わかりました」
ミケロットは彼のその言葉に対して頷いてきた。
「まずはこれでイモーラは陥落し」
「次はフォルリだ」
目標は決まっていた。
「フォルリに対しても同じだ」
チェーザレは言った。
「わかったな」
「はっ」
ミケロットはその言葉に頭を垂れた。イモーラの城塞も僅か二週間の篭城で陥落してしまいチェーザレはいよいよカテリーナのいるフォルリへと向かうのであった。
チェーザレのその大軍がフォルリまで来たのは暫くしてからであった。カテリーナはそれを聞くとすぐに自らフォルリの街に向かった。そして有力者達に問い掛けた。
「今ここにヴァレンティーノ公爵の軍が来ています」
彼女はまずこう言った。
「私は彼と戦います。よいですね」
「奥方様」
だが彼等はその言葉に対していい顔は見せはしなかった。
「何でしょうか」

それを察したカテリーナは曇った顔で彼等に問うてきた。
「ここはもう」
「イモーラも陥落しましたし」
「戯言を」
皆に全ては言わせなかった。
「それでは貴方達は御自由に」
「といいますと」
「下るも何も好きにすればいいでしょう」
最早彼等の心が降伏しかないとあっては言っても無駄であった。カテリーナも諦めるしかなかったのであった。それが彼女にとって好ましくない判断であったとしてもだ。
「貴方達には剣はないのですから」
今まではそう思って民のことは考えなかった。彼女はあくまで剣を持つ存在でありそのこと以外に思いを馳せることはなかったからだ。剣を持つ女、それ以外の何者でもなかったからだ。
「それでは我々は」
「ええ、どうぞ」
あらためて彼等に言い伝えた。
「ヴァレンティーの公爵に下れば宜しいでしょう」
「それでは」
「お許しを」
「許しなぞ求めてはいません」
カテリーナはまた言い放った。
「だからといって貴方達をどうこうするつもりもありません。ただ」
「ただ？」
「戦うだけです。宜しいですね」
「わかりました」
「では」
彼等はカテリーナの前から姿を消した。こうしてカテリーナは両腕を失うことになった。以後彼女はフォルリの隣にあるラバルディ

ーノ城塞に篭もることになった。遂にフォルリの民衆はチェーザレを歓呼の声で出迎えその声はカテリーナの耳にも入っていたのであった。

だがそれでも彼女は臆してはいなかった。じっとチェーザレの軍を見据えていた。フォルリがチェーザレのものとなった次の日城塞の前に一人の男が馬に乗ってやって来た。

「伯爵夫人に御会いしたい」

漆黒の服とマントに身を包み白い羽根のついた幅の広い帽子を被っていた。陰のある面持ちだが気品があり優雅な美貌も兼ね備えている男であった。

第六章

「宜しいか」
「奥方様にか」
城壁にいる兵士がそれに問うた。
「そうだ」
男は答えた。
「是非共」
「そう申しておりますが」
その話はすぐにカテリーナに伝えられた。彼女はこの時胸当てに抜き身の刀を手に城塞の中を駆け回っていた。その彼女に伝えられたのであった。
「私にですか」
「はい」
兵士はそう伝える。
「どうされますか」
「誰なのでしょうか」
「そこまでは言ってはいないのですが」
「ふむ」
だがそれがかえってカテリーナの関心を誘った。そうした意味では男の行動は当たっていたと言えるであろう。
「それでは奥方様」
「会いましょう」
カテリーナはその関心を自分でも拒むことはなかった。それで応えた。
「それでその者のいるところは」
「正門のところです」
「わかりました。それでは」
こうして彼女は正門に向かった。そしてそこにいる男を見た。彼

を見てすぐに気付いた。
「貴方は」
「はい」
まずは会釈をした。馬から下りていた彼はまるで舞踏会のそれのように優雅な会釈をしてみせた。カテリーナもそれに返したがそれはまさに舞踏会の挨拶のようであった。
男はにこりと笑って彼女に応えた。何とそこにいたのはチェーザレであったのだ。
「お久し振りです、伯爵夫人」
「以前御会いした時はまだ子供だったというのに」
「憶えておられましたか」
チェーザレはその言葉を聞いてにこりと笑ってきた。
「私のことを」
「勿論です」
カテリーナは城壁の上に立っていた。そこからチェーザレを見下ろしての話し合いであった。
「忘れる筈もありません」
「それは光栄です」
「かつてはまだ枢機卿にもなっていなかったというのに」
「あれから長い月日が経ちましたからね」
「そうですね」
カテリーナはチェーザレの言葉に頷いて応えた。
「あの小さかった坊やがここまで」
「だが貴女は変わるところがない」
チェーザレは顔を見上げてこう述べた。
「お美しい」
「有り難うございます」
「そして昔馴染みとして申し上げます」
「何をでしょうか」
「貴女のことは私も知っております」

チェーザレはカテリーナを見上げながら言ってきた。
「ですからここは」
「何をされるおつもりですか？」
「私としても知った顔と剣を交えるつもりはありません」
話をそれとなく本題に入れてきていた。カテリーナもそれを受けていた。
「ですからここは」
「公爵様」
だがカテリーナは悠然とチェーザレを見下ろしたまま述べてきた。
「私はスフォルツァの者です」
「はい」
チェーザレはまずはその言葉を受けた。
「無論それは存じております」
「ならばおわかりでしょう」
その整った顔に微笑みさえ浮かべて述べるのであった。
「運は勇気ある者を助け臆病者を見離すものです」
カテリーナだからこその言葉であった。彼女はその言葉のままに生きてきた。それだけに言葉には有無を言わせぬ強さがそこにはあった。
「私は恐れを知らなかった者の娘、如何なる不幸に襲われても断固として自分の人生の終わりまでその不幸の跡を歩んで参る所存です」
「最後までですか」
「そう、最後までです」
毅然としてチェーザレを見据えていた。
「私も国の運というものがどれだけ移ろい変わるものであるのかはよく存じております。ですが私は私の全てである祖先の名を汚すつもりはありません」
「スフォルツァの名を」
「そうです」
彼女はまた言い切った。

「私には自分を守るだけの力はあります。貴方もそれに対抗出来ない方ではないでしょう」
「ほう」
「チェーザレ＝ボルジアとして」
「ふむ」
チェーザレはその言葉を聞いてカテリーナにまた言った。
「それでは剣を抜かれるというわけですね」
「その通りです」
今正式に宣戦布告が為された。そのうえでカテリーナはさらに述べるのであった。
「スフォルツァ家の名誉を以って今貴方の御好意に報わせて頂きます」
「わかりました」
チェーザレはそれを受けて頷いてきた。
「それではそれで」
「はい」
二人の間に今風が通った。その風は見えはしなかったがそれでも二人の間を確かに通り過ぎ何かをもたらしたのであった。それは確かに二人も感じた。
「ですが申し上げましょう」
「何を」
さらに言うチェーザレの言葉に顔を向けてきた。
「貴女は私の腕の中に収めると。今ここに申し上げます」
「願ってもない御言葉」
カテリーナはその言葉を受けて笑った。今度は女としての笑みであった。
「それでは次は剣で」
「ええ、それで」
カテリーナはチェーザレの言葉を今度は受けた。そして互いにそれぞれの場所に戻り戦いに備えるのであった。今戦いは幕を開けた。

戦いは誰もがチェーザレの勝利に終わると見ていた。傭兵達もそう思ったいたからこそチェーザレについたいた。これはフランス軍も同じである。しかしカテリーナはやはり剣に生きる女であった。
手強かった。易々と陥ちると思われた城は中々陥落しなかった。そしてそのまま二週間が過ぎ三週間が過ぎた。カテリーナはそれでも粘り戦い抜いていた。流石はスフォルツァの者と賞賛する声もあればチェーザレの力量を侮りだす声も出て来ていた。
それをチェーザレの家臣達は敏感に感じていた。それでフォルリの街に本陣を置く彼にそれを伝えてきた。
「それはわかっている」
その報告に対するチェーザレの言葉は至極落ち着いたものであった。平然としてこう返してきたのだ。
「驚くことはない」
「そうなのですか」
「そうだ」
彼は悠然と言った。
「まだ陥落する気配はないな」
「残念ながら」
こちらの報告も本来なら彼にとって実に不都合な筈である。だがそれでも彼は落ち着いたものであった。
「フランス軍も傭兵隊もその士気を低下させてきております」
「中には持ち場を離れようとする者も」
「出て来ているというのだな」
「はい」
「憂慮すべきことかと」
この時代の兵士達は金で雇われた者達ばかりである。特にこのイタリアではそうであった。その為彼等は戦利品がない場合や敗北が明らかな場合には容易に寝返った。時には大規模な略奪を働き街に多大な損害を及ぼすことさえあった。後に神聖ローマ帝国とローマ教皇が対立した時にはドイツの傭兵隊によってローマが灰燼に帰し

ている。ドイツの傭兵達はその趣味の悪い服装でも有名なランツクネヒトであり三十年戦争においても悪名を轟かせている。マキャベリはそうした傭兵達を見て市民軍の設立を唱えていた。これは後に各国で実現されることになりチェーザレもそれを徐々に導入していったのである。

「そうか」

だがそれを聞いてチェーザレの様子は変わらなかった。

第七章

「深刻と言っていいな」
「はい」
「どうされますか」
「もう少しだ」
チェーザレは彼等の話を聞き終えて述べた。
「もう少し待ちたい」
「何か御考えが」
「うむ」
チェーザレは彼等に応えて頷いてきた。
「まずはだ」
「ええ」
「資金をさらに用意しておけ」
「資金をですか」
「そうだ、今充分にあるか」
「ええ、まあ」
「先日ローマからフォルリに多量の金貨を運ばせておきましたから」
「ならよい。よいか」
チェーザレはさらに述べた。
「その資金こそが大事なのだ」
「左様ですか」
「では敵の傭兵隊の買収を」
「さてな」
この言葉にはただ笑うだけであった。それ以上は言わない。
「だが資金は用意しておけ。よいな」
「わかりました」
「それでは」
「まずはそれだけでいい」

チェーザレは静かに述べた。
「攻撃は続けておけ。ただし無理はするな。よいな」
「はっ」
「了解しました」
報告をしに来た部下達は敬礼してその場を後にした。彼等が部屋を後にするのを見てからチェーザレは後ろにいるミケロットとリカルドに声をかけてきた。
「城塞の地図はあるな」
「はい」
リカルドがそれに応えた。そして一枚の羊皮紙の地図を彼の前に差し出してきた。
「こちらに」
「うむ」
チェーザレはその地図を受け取った。まずはそこに描かれている城塞の細部に至るまでを見回したのであった。
「大丈夫だ」
それを見終えてからまた述べた。悠然とした笑みを浮かべて。
「この城は陥落する。よいな」
「それではもう策が」
「ある」
今度はミケロットに答えた。
「もう少ししたらそれを実行に移す。よいな」
「御意」
そこからまた時が経った。城を攻めはじめてから一月が経とうとしていた。フランス軍は持ち場を離れだし傭兵達の士気は明らかに落ちていた。直属の家臣達はそれを憂いていたがチェーザレは相も変わらず平然としていた。
「閣下」
部下達が彼に声をかける。
「このままでは」

「そうだな」
ここに来て彼はようやく頷いてきた。
「時が来た」
「では総攻撃に」
「いや」
しかしその問いには首を横に振る。それからまた述べたのであった。
「市民達を呼べ」
「市民達をですか」
「そうだ」
何か話を読めないでいる家臣達にそう答えた。
「わかったな。すぐにな」
「あの」
「何だ」
それでも彼等はまだ話がわからずチェーザレに問うてきた。チェーザレもそれに怒ることなく彼等に応えるのであった。
「フォルリの市民達ですね」
「その通りだ」
チェーザレはまた答えた。
「わかったな、すぐにだ」
「わかりました」
「それでは」
こうしてチェーザレの前にフォルリの市民達が集められた。チェーザレは彼等を前にしてまずは堆く積まれた金貨を見せてきた。
「一体何のつもりなんだ？」
「まさか自分の富をみせびらかしたいだけか？」
「まさか」
その金貨の山を見て市民達は口々に囁き合った。どうにもチェーザレの考えが読めなかったのだ。
「聞いたか」

そして戦いの噂話をはじめた。
「戦いは全然進んでいないらしいぞ」
「そうなのか」
「ああ、もう一月経つがな。奥方様は頑張っておられるらしい」
「ああ、それでな」
別の者が言ってきた。
「向こうの大砲の弾に書かれていたらしいぜ」
「何てだ？」
市民達はその者の言葉に耳を傾けてきた。
「大砲はもっと緩やかに撃っては如何。貴方達の睾丸が千切れないようにってな」
「うわ」
「また品がないな」
カテリーナらしいと言えばらしいあからさまな挑発であった。それだけの余裕があるということであった。
「あの方はまだまだやる気らしいぜ」
「俺達はあの公爵様を選んだけれど」
「果たしてどうなるかな」
「さて」
チェーザレはそんな噂話を意に介さず下に控える市民達に声をかけてきた。今彼は広場の台の上に昇りそこから彼等に語り掛けているのだ。
「諸君等にまずはこれを見せた」
あらためて金貨の山を指差してきた。
「そしてだ」
指し示しながら言葉を続ける。
「これが欲しいか」
「当然だよな」
「今更何言ってるんだ、あの人は」
市民達はそれを聞いてまた囁き合った。どうにも話が見えてはこ

ない。
「欲しいのならば諸君等が望むだけ与えよう」
「おっ」
「くれるのか」
「それには条件がある」
「やっぱりな」
市民達はそれを聞いてすぐにこう思った。

第八章

「そう来たか」
「それで何だ？傭兵とかならお断りだぜ」
「薪を用意して欲しいのだ」
「薪をですか？」
「そうだ」
チェーザレは市民の言葉に頷いてみせた。
「薪の束をだ。それでいいか」
「それを作ればその金貨を頂けるのですか」
「そうだ」
チェーザレはその質問に答えた。
「多ければ多い程いい。どうだ」
「おい、何か」
「嘘みたいにいい条件だぞ」
市民達はその話を聞いてまた囁き合った。
「本当なのかな」
「あの人こういう話はちゃんと守るそうだぞ」
「わかったならばすぐに頼む」
彼はまた言った。
「それでいいな」
「はい」
「それじゃあ金貨の為に」
「お金の為に」
「よし」
意気あがる市民達を前にしてチェーザレは心の中で笑みを浮かべた。
「これでいい。後はだ」
彼はもう次の策に移っていた。市民に褒美と共に協力を取り付け

ると次には城塞のあるポイントへの集中砲火を命じたのであった。
「ここを集中的に叩け」
「そこをですな」
「そうだ、まずはそこだ」
チェーザレは将校達にそう述べた。
「わかったな。そして」
「そして？」
「その間に次の策に移る。わかったな」
「はあ」
どうにもチェーザレの策が読めないまま頷く将校達であった。だがその間にもチェーザレの策は動き実際に薪の束が作られて城塞の一部に集中砲火が加えられたのであった。
「一点にですか」
「はい」
その話はすぐにカテリーナにも伝えられた。彼女が聞いたのは集中砲火だけであったが。
「急にそこに攻撃を集中させてきました」
「ふむ」
カテリーナはそれを聞いて首を傾げさせた。彼女もまたチェーザレの真意には気付いてはいなかった。
「そこから攻めて来るつもりでしょうか」
「おそらくは」
カテリーナの家臣達も同じであった。彼等もまたチェーザレの真意は何かわかってはいなかった。
「どうされますか」
「決まっています」
カテリーナは答えた。
「まずはその部分の修復を」
「はい」
「そして兵力を集中させなさい。万が一の時に備えて」

「わかりました」
「といっても焦ることはありません」
カテリーナは城内への突入に警戒するように言ったうえでそう述べてきた。
「城塞の濠は深く広い。それを越えることは容易ではないのですかな」
「そうですな。それでは」
「まだ陥ちません」
カテリーナのこの言葉には微塵も動揺はなかった。
「まだです。よいですな」
「はっ」
城塞の者達はその言葉に元気付けられた。カテリーナもそう言ったうえで現場に向かった。するとそこには報告通りチェーザレの軍勢の集中砲火が加えられていた。
「この程度ならどうということはありません」
彼女は曲がった刀を右手にそう述べた。
「若し崩れても敵兵を退けて修復を続けなさい」
「それで宜しいのですね」
「充分過ぎる程に」
そしてまたこう述べてきた。
「濠が大丈夫なうちは」
そう言って濠を見た。見ればそこにチェーザレの軍勢が近付いてきていた。
「御覧なさい、無駄な努力をする者達を」
カテリーナは城壁の上から彼等を見下ろして家臣達に言った。
「彼等は結局は敗れ去り諦めることになるのです」
「それはどうかな」
この言葉は指揮を執るチェーザレの耳にも入っていた。彼はそれを聞いても余裕の笑みを浮かべていた。
「橋がないのなら作ってしまえばいい」

彼は言った。
「それだけのことだ。兵士達に命じよ」
「はっ」
将校達がそれに応える。
「濠に薪の束を投げ込んでいけとな。それが済み次第後方に下がれ」
「わかりました。薪束を濠に投げ込め！」
チェーザレの命令が伝えられる。
「そして濠を埋めてしまえ。よいな！」
「はっ！」
「そこの上に船を乗せる」
ジェーザレはまた言ってきた。
「それで橋にせよ。よいな」
「御意」
既に船が容易されていた。小舟だがそれで充分であった。濠は見る見るうちに薪で埋められていきそして遂には船が置かれた。カテリーナはそれを見て呆然としてしまっていた。
「な・・・・・・」
「流石にこれは思い付かなかったようだな」
チェーザレは城壁の上で呆気に取られている彼女を見て呟いた。
「だがこれで勝負ありだ。よいか」
「はっ」
「そのまま城壁を破壊せよ。それが終わり次第次の行動に移る」
「その次とは」
「決まっている」
その陰のある笑みに何かを楽しむものを含ませて答えてきた。
「総攻撃だ。よいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
彼はそこまで言うとまた街に戻った。そして持ち場をボイコットしていたフランス軍の隊長達を集めた。そのうえで優雅にこう述べ

たのであった。
「火曜日だ」
「火曜日に？」
「そうだ、全ては終わる。そして」
またあの何かを楽しむ笑みを浮かべてきた。そのうえでの言葉であった。
「火曜日には伯爵夫人は私のものだ。見ていてくれたまえ」
「火曜日ですか」
「そうだ、それだけだ」
そう言い伝えただけであった。だがそれがフランス軍を釣った。彼等はその言葉に恩賞を見出して戦いに復帰してきたのだ・全てはチェーザレの思惑次第であった。
「まさかこの様な方法があったとは」
完全に埋められ舟まで置かれた濠を見てカテリーナの家臣達は途方に暮れていた。
「城壁ももう」
「修復不能ですか」
「はい」
カテリーナにそう報告した。
「残念ながら」
「わかりました」
彼女はそれでもまだ肩を落としてはいなかった。毅然として報告を受けていた。
「それではそれで戦うまで」
「左様ですか」
「それとも」
カテリーナは家臣に問うてきた。
「私がそう易々と膝を屈するとでも？」
「いえ」
流石にそれは想像できなかった。その家臣もこの言葉には首を横

に振るのであった。
「それはないかと」
「わかっていればよいのです。それでは」
「ええ」
家臣はカテリーナの次の言葉を待った。そしてカテリーナはその次の言葉を発したのであった。

第九章

「皆剣を持ちなさい」
「城内での戦いですね」
「その通りです。私もまた」
その手に持つ剣が輝いたように見えた。まるで夜の中の月の様に。だがその輝きは月なぞ比べ物にならないまでに眩く、そして危険な光であった。
「参りましょう」
「わかりました。それでは」
「はい」
カテリーナは応えた。こうして彼女もまた剣を手に敵に向かうのであった。
次の日からチェーザレは軍を城内に雪崩れ込ませた。城壁も濠も無力なものとされたカテリーナの軍はこれを防ぐことができず容易に雪崩れ込まれてしまった。
「降伏するならば命は取らぬ！」
チェーザレは軍を突入させる直前に城内のカテリーナの兵士達に対してそう言った。
「何っ！？」
「私は決して無駄な血を欲してはいない。諸君等の命に対しては何の興味もない」
「本当か？」
「どうかな」
「降伏したいのならば武器を捨てよ。そして戦場を去るか我等につけ」
「どうするよ」
ここでカテリーナの軍に異変が起こった。ここにも傭兵がいた。傭兵は報酬や戦局次第で容易に寝返る存在である。チェーザレもカ

テリーナもそれはわかっていた。だがそれでも彼等を使うのがこの時の戦争であった。だからここでも彼等は当事においてはごく普通の行動に出たのであった。
「それじゃあいいか」
「ああ、そうだな。公爵様につこう」
こうして信じられないまでにあっけなく多くの兵士達が抵抗を止めた。城塞の四つの塔のうち二つがそれでチェーザレのものとなってしまったのだ。
「これで決まりですかね」
攻撃を仕掛けるチェーザレの軍勢を見ながらリカルドがチェーザレに言ってきた。彼等は今馬上にあった。ミケロットもそこにいる。
「さて、それはどうかな」
だがチェーザレはまだ完全な勝利を掴んだとは思っていなかった。冷徹なまでに落ち着いた目で城を見ていた。
「まだですか」
「そうだ」
彼は答えた。
「伯爵夫人もそう簡単には膝を屈したりはしまい。戦いはまだ先だ」
「それでは」
「そうだ、我々も行こう」
チェーザレはそう言って馬を進めてきた。
「よいな。そして」
「はい、伯爵夫人を虜に」
「火曜日までにだ」
彼等もまた城内に入った。既に城内は修羅場となっており剣を手にした激しい戦いが行われていた。
血飛沫が飛び腕や首が舞う。カテリーナもまたその中に身を置き円月の刀を振るっていた。
今また一人の兵士がカテリーナの斬撃の前に倒れた。彼女は倒れたその兵士を前に笑うこともなくまた次の敵を探していたのであっ

た。
「どうしたのですか？来ないのですか」
周りを取り囲むチェーザレの兵士達に対して問うてきた。
「この私を倒すか捕らえれば恩賞は思いのままだというのに。臆したというのですか」
「いや、それは違いますな」
それに応える声がした。
「貴女の武勇の前に誰も適わないだけなのです」
「そして貴方は」
「私ならば」
チェーザレがゆっくりとカテリーナの方に歩いてきた。ミケロットとリカルドを従え兵士達を分けてやって来た。その手にはみらびやかな装飾が施された白銀の剣がある。魅入られるまでに妖しい光を放っていた。それが戦場の砂塵の中に輝いていたのである。
「如何でしょうか」
「面白いですね」
カテリーナは悠然と笑ってそれに応えた。
「貴方とは一度手合わせしたいと思っていました」
「それは私もです」
チェーザレは優雅に笑ってそれに言葉を返した。言葉を返すと共にその手に持っている剣を構えてきた。そしてカテリーナもそれに続いた。
「それでは」
「はい。容赦はしませんよ」
「それはこちらも同じこと」
チェーザレも述べる。
「私が勝てば貴女は私のもの」
「そう上手くいくでしょうか」
「私は欲しいものは何があっても手に入れる主義なので」
それがボルジアであった。今それを堂々と述べてきたのだ。何も

怯えることはなく。
「今もまた」
「左様ですか。では私はスフォルツァの剣にかけて」
「それを拒むと」
「いえ」
しかし首を横に振りそうではないと言ってきた。その顔にはまだ笑みが残っていた。
「違います。私が欲しければ」
「勝ってみせよ、ですか」
「そうです。わかりましたね」
「ふむ、確かに」
チェーザレはその言葉に頷いた。じっとカテリーナを見据えながら。
「それではあえて」
「貴方も面白い方ですね」
「ボルジアの生き方が面白いというのならそうなのでしょう」
「そういうことですか」
「そうです。では」
二人は動いた。そしてまずは互いに剣撃を繰り出した。
それは受け合った。一旦退きまた攻撃に入る。カテリーナが仕掛けてきた。
下から上に刀を振り上げる。それでチェーザレの腹を裂くつもりであった。だがチェーザレの動きは速かった。それを読み切りその刀を払ったのであった。
「くっ」
しかしカテリーナは刀を離しはしなかった。そのまま握り態勢を立て直す。それからまた攻撃に移り今度は左斜め上から切り下ろしてきた。
「公爵っ」
家臣達がそれを見て声をあげる。だがチェーザレの動きもまた見

事であった。それをかわしてのけた。
攻撃をかわされたカテリーナは一瞬態勢を崩した。その一瞬が命取りになった。

第十章

チェーザレの剣が一閃した。それが彼女の右肩を斬ったのであった。

その一閃は掠っただけであった。しかしそれでも血を流させるには充分であった。

「これで勝負ありですかな」

チェーザレは肩を押さえたカテリーナに対して言ってきた。

「どうですかな」

「いえ、まだ」

しかしカテリーナはまだ勝負を諦めてはいなかった。

「私はまだ。まだ戦えます」

「左様ですか。では」

チェーザレはそれを受けてまた構えを取ってきた。再度勝負をするつもりであったのだ。

「お相手しましょう。宜しいですな」

「よいでしょう。では」

「お待ち下さい」

カテリーナもそれを受けようとしたところで今度はカテリーナの家臣達がやって来た。そして彼女の周りを固めてきた。

「まだ奥方様をやらせません」

「ここは我等と共に」

「退けというのですか」

「はい」

彼等はそれに応えてきた。

「その通りです」

「今はまだ膝を屈する時ではありません」

彼等は口々に言う。

「ですから」

「・・・・・・わかりました」
彼女も今はそれを受け入れた。ここは下がることにしたのだ。
「では公爵」
「ええ」
二人はまた見合った。だが構えは解いていた。
「また後程」
「あくまで戦われるのですね」
「ええ、その通りです」
返事にも何の淀みもなかった。
「ですから貴方もまた」
「私もまたボルジアの者」
チェーザレもまた負けてはいなかった。いや、この場合は勝敗が既に決しようとしているのにカテリーナはまだ傲然としていた。それは見事な程であった。
「何としても手に入れましょう」
「では私はそれをあくまで迎え撃ちましょう」
またそう言い合った。こうしてまた別れたのであった。
「見事なものだ」
チェーザレは戦場で悠然とした笑みをまたしても見せていた。だがそこにはいつもの影はなかった。
「ああでなくてはな。面白くはない」
「敵は中央に集まっております」
家臣の一人がそう報告してきた。
「そして大塔に最後の拠点を」
「あそこだな」
チェーザレはその場から見える巨大な塔を指差して問うた。
「あの塔だな」
「はい、その通りです」
その家臣はその言葉に頷いた。
「あれでございます」

「よし、わかった」
チェーザレはその言葉に頷いた。それからまた言うのであった。
「攻撃を集中させよ。残敵掃討の部隊を残しながらな」
「降伏した者達はどうされますか」
「捨ておけ」
彼はそこまでは奪おうとは思ってはいなかった。
「だがまだ戦うというのなら遠慮はするな」
「わかりました」
「戦いは最後だ」
彼は周りの者達にそう宣言した。これは傭兵達やフランス軍に対する言葉であった。
「これに勝てば恩賞は思いのままだ。よいな」
「はっ！」
家臣達はそれに応える。そして彼等も戦いに向かう。
戦いはその日のうちに終わりを迎えようとしていた。カテリーナは最後のあがきに塔内の弾薬庫に火を点けさせたがこれはかえってその煙で自身の兵達の士気を衰えさせてしまった。彼女にしては珍しい戦場での判断ミスであった。
このミスがなくとも趨勢は決まっていた。彼女は塔内でも次第に追い詰められ最上階にまで達していた。そしてそこで遂にチェーザレの降伏勧告を受け入れたのであった。
「ようやくですな」
最上階の一室でまだ傲然と胸を張っているカテリーナに対するチェーザレの言葉であった。
「貴女は私のものです」
「それでどうされるのですか」
「まずはこの城塞を出ましょう」
チェーザレは優雅な物腰でそう述べてきた。まだ戦塵立ち込める塔の中で場違いなまでに優雅な様子であった。
「全てはそれからです」

「恥はかかせないというのかしら」
「勿論です」
チェーザレはその優雅な物腰のまま答えてきた。
「少なくとも貴女に対しては」
「その言葉真実と受け取っていいのかしら」
「それは御勝手に」
何故かここでは言葉を突き放してきた。
「ですが私の応対は変わりません」
「そう」
「はい。ではこの塔を下りられますね」
「ええ」
カテリーナはその言葉に頷いてきた。急に言葉の語気が弱まってきていた。
「そうさせてもらうわ。それで」
語気がさらに弱まった。それはチェーザレにもわかった。
「後は・・・・・・」
最後まで言うことは出来なかった。カテリーナは遂に崩れ落ちその場に倒れ込んでしまったのであった。チェーザレはそんな彼女から目を離すことはなかった。
「誰かいるか」
彼はすぐに人を呼んだ。
「はい」
すぐにフランス軍の隊長の一人がやって来た。濃い髭の厳しい男である。チェーザレに比べると服装も雰囲気もかなり野暮ったい。この時フランスはまだ欧州においては田舎の大国といった感じであり文化的な先進地域はやはりイタリア半島であったのである。
チェーザレは彼に顔を向けた。そして彼に対して命ずるのであった。
「伯爵夫人を城外にお連れしろ」
「ここではなくですか」

「そうだ。もう戦いは終わった」
チェーザレは一旦窓の外に顔をやった。勝ち鬨があがり戦いが終わったことがはっきりと伝わってくる。
「もう残ることはない」
「わかりました。それでは」
「ではな」
ここでチェーザレは動いた。そしてカテリーナの肩を担いだ。
「行くとしよう」
「あの」
彼が肩を担いだのを見てその髭の隊長は目をしばたかせていた。
「公爵様が持たれるのですか？」
「一方はな」
チェーザレは隊長にそう返した。

第十一章

「だが一方は卿が頼む」
「ああ、成程」
そう言われてようやく納得がいった。こうした女性の扱いに関してもフランス男は当時はまだまだだったのである。これは今のように洗練されるのはやはり歴史があってからである。ヴェネツィアの富豪メディチ家からカトリーヌ＝ド＝メディチが嫁ぎ彼女が美食と優雅を持ち込んでから変わっていくのである。だがブルボン王家の開祖であるアンリ四世やその子でデュマの小説にも出て来るルイ十三世の頃はまだ粗野さが宮廷にも残っていた。太陽王ルイ十四世の長い治世下におけるバロック時代からフランスは変わっていくのである。十九世紀中頃にはあのすましてキザなパリジャン達が街を支配するようになっていたのだがそれまでには実に多くの歴史があったのである。
「それではその様に」
「うん」
こうしてチェーザレは隊長と共にカテリーナを城から出した。そしてそのまま街に入りまずは戦後処理を命ずるのであった。
「降伏した者の命は助けよ」
「はい」
まずはそれであった。
「そのうえで我が軍に組み入れよ。よいな」
「そしてまた軍を強くすると」
「その通りだ」
チェーザレは家臣の問いに頷く。破った敵軍の兵士をそのまま自軍に入れるのは常である。敵兵を皆殺しにするよりもそちらの方がずっと都合がいいのである、
「わかったな」

「わかりました」
家臣達は主のその言葉に頷いた。
「それではそのように」
「そしてだ」
彼はさらに言葉を続けた。
「戦利品は兵士達で山分けするようにな」
「ええ」
これは当然の権利であった。兵士に対する報酬である。彼等はスフォルツァ家の財宝もまた目当てだったのである。チェーザレもそれに応えなくてはならなかった。
「ただし武器を持たぬ者には手を出すな。これは常に言っているようにだ」
「では女は」
「娼婦達を雇っておいた」
彼はニヤリと笑ってみせた。
「好きなだけ遊べと伝えよ。私からの褒美の一つだ」
「有り難き御言葉。兵達も喜びましょう」
略奪と暴行は戦争の常である。だがチェーザレはそれを統制が取れなくなるとの観点から好まなかった。だからこうして自腹を切ってまで配慮したのである。自身へのそうした面での悪評と統治下に収まる土地や民衆への被害を避ける政治的な理由もそこにはあった。
「そうだ。兵士達には楽しめと言え」
「ええ。ところで」
「何だ？」
家臣の再度の問いに彼はまた顔を向けてきた。
「公爵様の取り分は」
「それはいい」
だが彼はそれを受け取ろうとしなかった。
「私はもう充分なものを得ている」
「イモーラとこのフォルリですか」

「それだけではない」
彼はさらに言った。
「充分なものを手に入れた」
「充分なものを」
「そうだ。だから私のことにまで気を使わなくてもよい」
「左様ですか」
「そうだ。ではな」
話を終わらせてきた。家臣もそれに応えた。
「下がれ。そして勝利の美酒でも楽しめ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして話は完全に終わった。彼は話が終わると奥に下がった。そしてその足である部屋に向かうのであった。
そこに入るとカテリーナがいた。既に鎧は脱ぎ身を清めていた。美しいドレスさえ身に纏っていた。
「あらためてはじめして」
チェーザレは部屋に入るとまずは彼女に一礼してきた。やはり優雅な、舞踏会でのダンスを誘うような礼でであった。実に洗練されたものである。
「お休みになられましたかな」
「はい」
カテリーナはその言葉に頷いてみせた。見ればその顔からはもう疲れはなかった。
「お陰で」
「さて、戦いは終わりました」
チェーザレは扉を閉めてから彼女にこう言ってきた。鍵が閉まりその鉄の音が部屋の中に響いた。
「そして城は陥落しました」
「ええ」
カテリーナはまた頷いた。

「私の負けですね」
「そうです」
チェーザレはその言葉を聞いてその整った顔に笑みを浮かべてきた。
「おわかりだと思いますが」
「これまでのお話ですね」
「そうです。そしてここにいるのは二人だけ」
彼はそれをあえて言ってきた。
「私と貴女だけです」
「では望みを果たされに参られたのですね」
「その通りです」
優雅に笑って応えてきた。
「それでは宜しいですね」
「今の私は敗れた身」
カテリーナはそうチェーザレに返してきた。
「それは認めましょう」
「そしてあの言葉も」
「はい、それもまた」
彼女は認めると言った。だがそれでも悠然と立ってチェーザレを見ていた。そこには戦場にあったのと全く同じ覇気が見られた。
「話が早い。それでは」
チェーザレはここでテーブルの上に置かれているグラスを手に取った。そのグラスに赤いワインを注ぎ込む。それからそのワインを飲み干してきいた。
「ですが」
しかしカテリーナはここで言ってきた。
「私は相手が誰であろうと誰かの手に落ちる者ではありません」
「ほう」
そのグラスを微かに動かしてその言葉に応えてきた。
「面白いことを仰る。ここでですか」

「そうです。何処であっても」
そう言葉を返す。
「誰であっても」
「貴女に勝った男を目の前にして」
「そう、私は誰の手の中にも落ちはしません。ですが」
「ですが？」
チェーザレはその言葉に顔を向けさせた。そのままじっとカテリーナを見やる。
「私が選ぶなら話は別です」
「ほう」
「ワインを頂けますか？」
カテリーナはチェーザレにあらためて言ってきた。
「まずは一杯」
「まずはですか」
「はい」
カテリーナはそれに頷く。
「そうです。私は選びました」
ワインが注がれるのを眺めながら言ってきた。落ち着いた声で。
「私を負かした者を今」
「それでは」
チェーザレはその言葉を聞きながら今注ぎ込んだ杯を手に取ってきた。
「この杯を受けて頂きますね」
「勿論です」
そう答えてにこりと笑ってきた。
「喜んで」
「それでは」
チェーザレが杯を差し出す。その顔は楽しげに笑っていた。
カテリーナがそれを受け取る。受け取るその顔は敗者とは思えない自信と美貌に溢れていた。それはまさにスフォルツァの女の顔で

あった。

女傑　完

2006・12・23

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3205f/

女傑

2010年10月8日13時46分発行